

「ドイツ語圏の社会と文化」 ——ドイツにおける反ユダヤ主義の歴史について

関 口 宏 道

はじめに

本稿においては、(1) 2005 年秋の授業の内容と方法、(2) 授業の具体的テーマと課題に対する学生の声と反応について報告したいと思います。

(1) 授業の内容と方法

授業の内容としては、「ドイツ語圏の社会と文化」というテーマからして、広くドイツ語圏の社会と文化全般についての講義が相応しいことは言うまでもありません。しかしながら、前期においてすでにこうした講義がなされており、後期にあつては、限定されたテーマと取り組むことも必要であろうと考えました。限定されたテーマを出来るだけ深く、専門的に掘り下げて、学生に問題提起をしようと思いました。そのテーマとは、ドイツや日本において、人間の人間による差別、他者に対する偏見の本質は何か、それはどのように形成され、克服されるべきであるのかという問題です。この問題を、現代ドイツにおいて繰り返し持ち出されるホロコーストの問題、「過去の克服」の問題、反ユダヤ主義に関する政治的論争などを取り上げる中で考えてゆくことにしました。また、キリスト教と反ユダヤ主義の関係については、従来あまりにも軽視されてきたように思われます。この問題はキリスト教を一層深く理解する上で役立つであろうと思われます。

授業の方法に関しては、シラバスに毎回授業後にレポートを提出、毎回 10 点満点で次週に返却すると書いておきましたので、これに恐れをなした学生もいたようです。他方では、授業に集中しなければならないから、また授業に集中

しさえすれば予習、復習の必要がないから歓迎という意見もありました。実際問題としては、授業直後にレポートを提出させることはかなり難しいことであると思いました。レポート作成には少なくとも 30 分は必要であり、そのために講義内容を調節することにもなります。また、欠席した学生の扱いも難しい問題です。レポートの内容は、授業で問題とした中から課題を提出して、課題に答えるばかりでなく、必ず自分の意見や感想を書くことを求めました。

授業では毎回 B4 のプリントを 4-5 枚印刷して、授業前に学生に配布しました。そのプリントは、ドイツにおける反ユダヤ主義の歴史を学問的に、原典を引用しながら考察をしているものを、日本語で読めるように翻訳したものです。これをもとにしてさらに解説を加えてゆくという方法をとりました。専門的な語句や、登場人物について学生の理解を助けるという意味で簡単な解説を加えました。先に述べましたが、これらのプリントと解説を聞いて、すぐにレポートを書くことはやはり難しいようですので、第 3 週目あたりからは、レポートの提出を次週とすることにしました。このため時間的な余裕が生まれ、テーマに関心を抱く学生は、課題について広く深く調査して報告していました。勿論、インターネットで調べて、それをそのまま引き写してすませる学生もいました。授業では数回を予定して、テーマに関連するビデオを観ました。これに対する学生の要望はかなり強いものがあるようですが、しかしビデオを授業で利用するのは便利ではありますが、他方ではどのように利用するのかは難しい問題です。ただ見るというのでは授業になりません。2005 年には、「ヴァンゼー会議」、「アウシュヴィッツの証言者はなぜ自殺したのか」と題するビデオを見ました。ビデオに関しては、かなり詳しくメモを取ることを求めました、薄暗い中でメモを取ることは大変ですが、学生の多くは真剣にメモを取っていました。これについても次週にビデオの内容と感想を提出させました。

(2) 授業の具体的テーマと課題に対する学生の声と反応

2-1. 講義内容と目標、ドイツにおける反ユダヤ主義の現状を紹介。

(以下学生の声は「 」で紹介)講義の目標は、反ユダヤ主義について客観的

に理解すること、この問題を現代社会における差別、偏見の問題と合わせて考えることとした。日本における「過去の克服」という問題に関心を抱いて、歴史の問題を現代の問題と関連して考えることの必要性を強調した。本講義が、人間はなぜ他者を差別するのであろうかという根本的な問題を考える契機になったと述べる学生もいた。「今日初めて過去の出来事がもたらした『今』を知った」。「一番興味を持ったのは、過去はまだ終わっていないと現在も存在しているということです」。何人かの学生はまた『アンネの日記』、『夜と霧』、『戦争の記憶』、『アウシュヴィッツ』や『シヨア』（ユダヤ人大量虐殺など）について承知していた。

2-2. 人びとはなぜ大量殺人に手を貸したのかという問題に対する Ch.ブラウニング（『普通の人びと』）と D. J. ゴールドハーゲン（『ヒトラーの自発的死刑執行人』）という二人の学者の主張を紹介。

前者は、人種主義と権威主義的人格という概念をもって、普通の人間が順応への圧力のもとに殺人を容認するにいたったとする。これに対して、後者は、ドイツ社会は伝統的に「悪意ある反ユダヤ主義」を持つ社会であるとした上で、大量殺人を行った普通の人間に焦点を当て、彼らは喜んでヒトラーに協力したのだとする。ほとんど共通の資料に基づいているにもかかわらず、両者の見解は大きく異なっている点に、学生は非常に驚いていた。この問題もまた学生たちに、「集団と個」のあり方を考えさせる契機になったようである。学生は両者の見解についてまとめをした上で、自分の考えを述べている。前者を支持する学生が若干多かったが、ドイツ人をヒトラーの自発的死刑執行人とした後者の見解に驚き、彼の主張は、「新しい側面からアプローチして、従来にない見解を展開することの重要性を示してくれた」とする学生もいた。「ユダヤ人迫害に加わった人びと、加わらなかった人びとを、行動を自ら決定することのできた責任者として捉えることは重要である。そうでなければホロコーストは戦時中の集団狂気としてしか分析されない」と述べる学生もいた。

2-3. Ph. ビューランの『なぜドイツ人が』の主張を紹介。

これはドイツ人のアイデンティティの問題と反ユダヤ主義を関連させ、ドイツ人は自己のアイデンティティを確立させるために、ユダヤ人の存在を否定したとする主張である。「今もこの否定することによって確立するという考え方は、存在すると思う。この考えが歴史上でも大きなポイントとなったことに驚いた」。「アイデンティティという観点からホロコーストを考えたことがなかった。人は不安に陥るとひとつにまとまりたくなる。ドイツ人のアイデンティティにユダヤ抹殺という概念が当てはまるとすれば、これは非常に恐ろしいことであると思う」。「人はどんな環境、社会においても、人を差別化することによって自己のアイデンティティを確立しないではいけないのだと思う。そう考えると、ドイツ人の反ユダヤ主義というものは決して人間として逸脱したものではなく、恐ろしくも今の時代においてでも誰でも持ち得る一般的なものではないか」。「ユダヤ人大量殺戮という狂気が起きてしまったのには、こんなにも多くの要素が絡んでいたことに驚いた。ユダヤ人を自らの対極に捉えて、憎悪・迫害してまで(自己のアイデンティティを)守ろうとするところは、正直理解に苦しんだ」。以上のように、学生はユダヤ人大量殺人の原因に関しても様々な要因があったことに驚き、かつ多面的な理解の必要性を感じたと思われる。なお、日本人「杉原千畝」を紹介したが、これもまた多くの学生はその存在について知らなかったと述べている。

2-4. G. アリの『ヒトラーの民族国家』の主張を紹介。

これはホロコーストの決定的な推進力は反ユダヤ主義ではなく、自己の権力維持のために、国民に善行を振りまく、「親切を振りまく独裁」であったという主張である。ホロコーストの物質的、経済的側面に焦点を当てたものである。アリは、現代史の中で最も首尾一貫した大量強盗殺人として分析されない限り、ホロコーストは理解出来ないままであると述べている。さらに、彼は「何百万という一般ドイツ人が多くの利益を得ていたという事実に関して語りたくない者は、ナチズムやホロコーストについては沈黙すべきであると語る。学生の多く

はこの主張にも大変に驚かされたようである。このような見解は聞いたこともなかったと述べる学生もずいぶんいた。「アリの主張は非常に斬新なものであった。なぜかという、一般的に考えて、敗戦国がどうしても軍備力を短期間で蓄える事が出来たのか、また敗戦国にも関わらず、いかにしてあれほどの戦争熱を国民にもたらしたことに関して、アリの説明はそれを説明するのに実に理にかなっていた、国民への善行政策、社会福祉政策は大きな役割を持っていると思う。ナチスの飴と鞭の政策は明らかにドイツ人には飴だけ、ユダヤ人には鞭というものではないだろうか、このようにいろいろな側面から物事を捉えることにより見えてくるものがあるということがよく実感できた」。イデオロギーではなく、物質的利害が問題であったとするアリの見解への疑問もかなり提出されたが、一方では同感するとの見解もあった。なお、アリはドイツ人を危険な物質主義者として単純化している、ホロコーストにおけるイデオロギー、反ユダヤ主義の役割が軽視されている、帝国を支えたのは、「親切を振りまく独裁」ではなく、「動員独裁」であったというイギリスの経済学者の反論を紹介した。いずれにしても、学生は「正しいこと、間違っていること、この二つを判断することがこれほどまでに困難であることに気付かされた」ようである。

2-5. 「ヴァンゼー会議」のビデオを見ての感想

「ヴァンゼー会議」とは1942年1月20日、ベルリン郊外のヴァンゼーで開かれたナチ高官と政府官僚とのヨーロッパのユダヤ人に関する最終解決を確認する会議であった。そこではユダヤ人の殺害方法やユダヤ人定義などが論じられた。このビデオは残された会議の議事録に基づいて再現されたものであるが、インターネットで検索した結果、この議事録は存在しないという報告を信用すると述べた学生もいた。このビデオに関して、会議の中心人物の一人アイヒマンとハイドリヒについて調べて報告するという課題を出した。ハイドリヒに関連して、彼が後に暗殺されたことに対する報復としてチェコのリディツェ村(ナチにより村がほとんど壊滅した)の事件を紹介した。ユダヤ人の運命を左右する

この会議の雰囲気がいまに淡々として、冗談交じりの中で進行していたことに、90分でヨーロッパの1100万のユダヤ人の運命が決定づけられたことに多くの学生が衝撃を受けた。「そこには人の命という誰もが大切にすもの概念すら排除されているような気がした。人はここまで人の命というものをおろそかに考えられるものなのかと、驚きと同時にショックであった。それと同時に、こんなユダヤ人を人として扱わずまるで虫けらのように扱い、そしてそのことが当たり前のことと思っている人びとについて、理解しようとしても無理なのではないかと感じ、とてもむなしく思えた」。このビデオを見て感じたことは、「ホロコーストが実に巧妙に、国家レベルで合法的に行われようとしていたことの証明書を見せられているよう」であった。また、学生はこのビデオから、チクロン B の使用が決定されたことや、ヒトラーが直接ユダヤ人殺害の命令を出してはいない(その命令書は見つかっていない)ことを理解したようである。アイヒマンに関しては各自が調べた結果、様々な驚きの事実を知るに至ったと思われる。学生たちは、リディツェ村の事件に関しては誰もその存在を知らなかったが、調べた結果は驚愕と怒りであった。

2-6. 日本におけるホロコースト否定論、ないし修正主義論者についての紹介。

1995年の雑誌記事「マルコポーロ事件」の内容について調べることを課題とした。すなわちホロコーストや、ガス室などは捏造であり、そもそもそうしたものは存在しなかったという主張である。圧倒的に多くの学生がこの事件については知らなかった。そして日本でもこうしたホロコースト否定論を唱える勢力のいることに驚かされたようである。これを調べる中で、かなりの学生は無条件にガス室の存在を前提にしていたことを考え直すことになったようである。「このような事件があったことを知らなかった。ホロコーストの最終解決、それは収容所での毒ガスを使った虐殺、と言う主張が絶対的なものだと思っていた。勿論この記事の内容を支持するつもりはないが、ただ過去の史実に疑問を抱き、考察してみることも必要ではないかと思った」。「歴史の真実は何であるのか、

そのことを深く考えさせられ、歴史は非常に正確に議論され、吟味される必要があり、時にはその説が大きな影響を与えるという側面を忘れてはいけないことに強く気づかされた」。多くの学生がいかに判断すべきか戸惑いを隠せなかったようである。また、ドイツではアウシュヴィッツはなかったなどの発言は処罰の対象となること、この記事がもとで雑誌が廃刊に追い込まれたことも、言論の自由という観点から考えさせられたと述べる学生もいた。いずれにせよ、この事件をどのように判断するのかという点で、大きな課題を突きつけることになったと思われる。

2-7. 反ユダヤ主義の定義と問題性、様々な反ユダヤ主義の形態、とくに現代の反ユダヤ主義、副次的反ユダヤ主義とよばれる「アウシュヴィッツゆえの反ユダヤ主義」について説明。また、これらの概念整理はいわゆる理念型であり、現実を理解する上での手段であるとも説明した。学生は様々な形態の反ユダヤ主義が存在すること、今も反ユダヤ主義を主張する勢力のあることを理解したようである。

2-8. 聖書の中の反ユダヤ主義と十字軍時代の反ユダヤ主義

キリスト教古代教会の時代よりキリスト教とユダヤ教との間に緊張関係にあったことを示した。そして課題として、キリスト教とユダヤ教との相違について調べることを課題とした。かなりの学生がこれらの宗教に関しては漠然としかその内容を理解していなかったことに気づいたようである。「ユダヤ教について今までほとんど考えたことがなかった。宗教の一つで、キリスト教と同じルーツをもつもの、ということしか認識していなかったので、今回このように大まかに違いを調べただけでもこの二つの宗教が共通点を持っているにもかかわらず、全く異なる主張を持つ対立する宗教であることに気づいた。私たちはそれらの問題を傍観してはいられない立場になってきていると思う」。この問題も、従来当然として無意識に受け入れてきたものへの疑念を抱き、再考を促すきっかけになったかと思われる。

十字軍時代にユダヤ人に対する攻撃が始まったこと、また聖餅冒瀆非難、儀式殺人非難などの非難・中傷が中世以来現代にも続いていることを示した。また14世紀、ペストの時代にユダヤ人が泉に毒を投げ入れるという非難が持ち出されたこと、宗教的のみならず、社会的、経済的視点が生け贄としてのユダヤ人に向けられるようになったことを示した。

2-9. ルターと反ユダヤ主義について

このテーマは、ほとんどの学生を驚かせるに十分であった。宗教改革の導き手として知られたルターがユダヤ人に対して激烈な批判、非難をしていることを知ったからである。「ルターのこうした一面を知る機会があって本当によかったと思う。これを知らなければ、私の中でルターは世界史で習った宗教改革で活躍した英雄であり、それはずっと変わらなかったと思う。今回学んだことは、まさにルターの光と影の、影の部分のように思える」。「ルターというと彼自身が行った宗教改革運動ばかりに焦点が当てられて他の宗教との関係など考えたこともなかった。意外にも彼がユダヤ教徒に対して反感を持ち、過激な対応をしていたことがわかった。そしてあまりにもナチス時代のホロコーストとの類似点が多いことに驚いた」。「ルターとユダヤ人問題から私たちが学ぶことは影響力のあるものの言動の恐ろしさである」。「ルターの反ユダヤ主義を考えることで、改めてステレオタイプやイメージが私たちの行動に影響を与えており、それが人びとの間に大きな問題をもたらし軽視できない問題であるということを感じた」。この問題を調べて「ルターはヒトラーの前身か」という自分のテーマと取り組んだ学生もいた。ルターは反ユダヤ主義者であったのか、ヒトラーの先駆者であったのかどうかは議論のあるところであるが、学生がこうした問題への関心を持ったことだけはたしかである。

2-10. 近世における反ユダヤ主義について

近世における反ユダヤ主義においては、宗教的反ユダヤ主義から世俗的反ユダヤ主義への移行が顕著であった。とくにこの時代のユダヤ人のあり方を典型

的に示した人物、領邦君主の宮廷御用人として活躍し、没落したオープンハイマーについて詳しく見た。また啓蒙思想家と反ユダヤ主義の問題をも考えた。さらに、ユダヤ人解放運動とならんで活発化した反ユダヤ主義運動は、外なるフランス、内なるユダヤ人という思想で戦われた。この時期の指導的人物の思想を紹介した。この時期には明らかに経済的利害が反ユダヤ主義の背後にはあった。

2-11. ヴァーグナーと文化的反ユダヤ主義、ヴァーグナーとヒトラーについて

実際にヴァーグナーはヒトラーとナチスにとって、文化的のみならず政治的にも精神的にも先駆的存在であったのであろうかという問題である。多くの学生は、ヴァーグナーが反ユダヤ主義者であったという主張には困惑しつつも、これに同意していたように思われる。「まず私は文化的反ユダヤ主義があることに驚き、ヴァーグナーもそうであったということを初めて知り、これまた驚いた」。「世界的に有名な音楽家であるヴァーグナーがこんなにもヒトラーに強い影響を与えていたと言う事実にとっても驚いた、ヒトラーの生き方、考え方を変えたヴァーグナーの音楽、考え方はいわば宗教の教えであるかのように見える」。「ルターにしろ、ヴァーグナーにしろ、私たちが知っている一面とは違う一面を持っていることに驚愕した。これからも彼らの思想や音楽は称賛され聞かれ続けてゆくであろう。しかし彼らの負の部分も忘れてはならないであろう」。次のようなレポートを寄せた学生もいた。「今回自分が考えたのは、自分が崇拜するものや人に対してステレオタイプになることの恐ろしさである、(中略)ヒトラーのアイデンティティのほとんどがヴァーグナーの音楽や思想で占められていたと考える事が出来、ヴァーグナーの反ユダヤ主義の思想がヒトラーを大量虐殺に向かわせたと解釈出来る」。また別の学生は、ヴァーグナーがヒトラーによって乱用されたのだとは考えられないとして、ヴァーグナーをユダヤ人大量殺戮の当事者と見る事が出来るとしている。「ヴァーグナーの反ユダヤ主義的煽動文書と『我が闘争』に見られるヒトラーの人種差別的な文化政策上

の妄想が、歴史的にも内容的にも関連があったことには疑いが無い」。

2-12. ドイツ帝国における反ユダヤ主義についてのプリント部分の要約と感想

従来反ユダヤ主義は宣伝と散発的な暴力行為に留まっていたものが、この時代にそれらが組織的に行われるようになった。反ユダヤ主義的政党と団体の出現である。反ユダヤ主義は社会的利害集団の内部的統合に重要な役割を果たした。同時に、この時代に自ら「科学的人種主義」を標榜する人種主義的反ユダヤ主義が登場した。とくに、トライチュケや人種主義理論家、ゴビノー、チェンバーレンなど、また大学人と学生の反ユダヤ主義について説明した。あらゆる階層にわたる反ユダヤ主義の傾向を見て、「ドイツにおいて潜在的に反ユダヤ主義は存在し、かつそれは社会的に増幅されていった。これらはユダヤ人の意志とは関係なく、当時の社会的な不満を転換されるような形で押しつけられていった」。「今回は多くの知識人によってイデオロギー的に正当化されている反ユダヤ主義についての主張を読んで、この時代に反ユダヤ主義がドイツで本当に大きな影響を与えていたのだということを感じた。学識的に著名な人びとの主張であっても、私にはまったく説得力をもったものには聞かえないが、その主張が当時は多くの人びとから支持されていたということは、社会的に反ユダヤ主義があまりにも一般的な考えとして疑われることもなく認識されていたことの影響ではないかと思う。(中略)現代でも、私たちの気づかないうちにこのようなことが起こっているかもしれないと思うと、改めて自分の住む世間について再考してみる必要があるのではないかと思った」。「ドイツ帝国の反ユダヤ主義は、多くの学問、多くの主張、多くの社会問題によって発展していったということがわかった。(中略)誰かを悪者にして、その不満は自分のせいではないということを証明したかったのではないかと思われる。(中略)人びとにとってそれは(人種主義的反ユダヤ主義)は反ユダヤを正当化し、反ユダヤ主義を唱える自信となっていったのであろう。学問を盲目的に信頼し、その正当性を議論しないということはとても危険なことではないかと思う」。「反ユダヤ主義と

いうものが一つの政治的取引の道具として機能していたということである。(中略)つまり、反ユダヤを掲げることで人びとの支持を獲得し、同一の思想を持つことで内部の組織化、統一化に役立つのだ。「社会不安が増大すると、人びとは大衆として、単純明快で二元論的なイデオロギーを持ちやすく、扇動家に操られやすくなる。このことは現代にもあてはまることである。しかし、ものごとを二元論的に見ることは危険であるし、また社会的現象や事件は長期的な目で見て解決されなければならないと思う」。

2-13. 「アウシュヴィッツの証言者はなぜ自殺したのか」

ヴァイマル共和国時代とナチ第三帝国時代、さらには第二次世界大戦後の反ユダヤ主義について詳細に検討する時間は残されていなかったのので、ビデオを見てナチズムと反ユダヤ主義の問題を考えようとした。そのタイトルは「アウシュヴィッツの証言者はなぜ自殺したのか」である。強制収容所の生き残りであったイタリア系ユダヤ人のP. レーヴィをめぐるルポルタージュである。学生のほとんどは彼の存在を知っていなかった、そして収容所の実態、レーヴィの生き方に大きな衝撃を受けたようである。「今回ビデオを見て、自分がアウシュヴィッツについて抽象的なイメージしか持っておらず、明確な事実に関する具体的知識はまったくもちあわせていないことがあらためて分かった」。「まず、タイトルを聞いて、愕然とした。どうして、地獄から生還したもの、つまりもっとも命の尊厳を知っているはずであろう人が自分で自分の命をたつようなことがあるのだろうか。この疑問が頭から離れなかった。しかし、ビデオを見終わった時に、自分の中でその答えがでたように思えた。『生かされた特権とその結果がつり合わないのでは?』(中略)他人の代わりに生きていると言う感覚が心を蝕み、自分が生きているという感覚をなくしてしまったのであろうか。『ビデオに出てきた『記憶することは人間の義務、伝えることをしないのは人間としての義務を行っていない』としてユダヤ人虐殺を忠実に伝えようとしてきた彼の言葉と態度が印象に残った。しかし彼は、自分は所詮死から逃げ生き延びた人間であって、本当のユダヤ人大量虐殺の証言者は死んでいった人たちな

「ドイツ語圏の社会と文化」

のだと言っていた」。「今回このビデオで、戦争、ユダヤ人そして私たち日本人について考えることができて、さらに戦後の、生き残ったユダヤ人の苦しみについても理解することができた」。「今回の授業でブリーモ・レーヴィについて知ることができたことを本当に幸運であったと思う。いかに生きるか、ということを考えさせられた。彼を書いたものを読もうと思う」。

おわりに

大量のプリントを読み、毎週レポートを提出することは学生にとってもかなり大変であったようである。課題も難易度が高かったが、それに対して自発的に調べて書くという習慣がついて、有益であったとする意見もあった。テーマ自身も限定されたものであったが、自分にとって刺激となった、あるいは問題意識が明確になっていったとの意見もみられた。プリントと映像、時には書籍、写真などを利用したことは学生の理解を助けたようである。全体として当初の目標であった人間の差別、偏見に関する理解や関心を幾分か高めることに成功したのではないかと思います。定説への疑問や自分で判断することの困難などを学生は理解したのではないかと思います。また、学生は、こうした人間の差別、偏見の問題はドイツに限定されるものではなく、とくに日本との対比で考える必要性を認識したと思います。それにしても、いかに限定されたテーマとはいえ、それに対して自分たちがあまりに無知であることに愕然としたのではないかと思います。これも学習の成果のひとつかもしれません。

学生の授業に対する感想をアンケート調査の記述の中から幾つか紹介しておきたい。「一つの問題に対してこんなに深く勉強できる授業はあまりないと思う。毎回の授業で毎回新しい知識が身に付いていく感じがした。とても内容の濃いプリントまたビデオを使っの授業でとても興味が持てた」。「2年間の中でもっとも充実した授業と言ってもいいくらいだ。そこまで有意義であったのは、膨大な資料、そして毎週出されるレポートに起因すると思う。毎週何十枚も配られるプリントには、相当な量の情報がつまっていた。また、レポートは毎週出されるので、はじめは大変だなという気もしたが、だんだんと文献や資

料を集める能力，そして自分の主張を文章で表す能力が授業前とは比べものにならないほど向上することができたと思う。そして何よりよかったと思うのは，自分が一生かかってでも学びたいと思えるようなテーマが見つかったことだ。この授業をうけて，目標を見つけることができたし，考え方にも大きな変化をもたらしたと思う」。